

乃木坂スクール 第4回 2012/5/10

「コミュニケーション・社会・幸せ」 野澤和弘先生

氏名：榊 茜

こんなに聞いていて心地のいい授業は初めてでした。

まるで、知り合いに語りかけるかのような野澤先生の語り口調がとても心地よく、野澤先生の世界に自然と入っていくことができました。先生に御礼を伝えたいです。有難うございました。プレゼンの仕方、先生が米田さんや福島さんと共有した時間を、私たちがイメージしやすいようにセリフで紹介いただくことでまるでその場にいるかのように感じることができました。

先生がご紹介くださった方々、事件の殆どを私は恥ずかしながらこの授業で初めて知りました。東大病院で看護師として働いていたけれども（時期は事件と重なりませんが）おぼろげにしか知りませんでした。

この事件にまつわる先生のエピソードは、私が抱いていた「記者」のイメージを変えました。記者というのは、淡々と、事実を受け止め言葉にして伝える、というやや機械的で感情を排除した（しなくてはいけない）職業だと思っていたのです。先生が正直に語ってくださった、記事を書くにあたって、書いたあとの感情の揺れや変化などは非常にリアルで心をつかまれました。

こんな思いをしながらそれでも書いて、世に伝えることを続けなくてはならない職業である記者は想像以上に責任が重く苦しいことがあるのだと感じた次第です。

私は看護系の大学院で看護研究をし、論文を書きました。

その研究は質的研究とよばれる、研究対象者にインタビューを行い、言葉をデータと考えて分析をしていくものでした。インタビューをするうえで、なかなかこちらが話してほしいと望んでいることが対象者の口から出てこずに悩んだこともありました。自由に語ってもらうなかで意味付けされた意識を引き出す、意味付けされていない意識をことばにすることが困難で、つい誘導的になってしまうこともありました。出てきた言葉も、自分というフィルターを通して解釈し分析することで、「これは本人が意図していたものとは違うのでは？」と度々思っていました。

しかし、授業のあとの質問に「できるだけまず生い立ちから語ってもらって、その人がどういう人生を今まで歩んできたのかを理解して、あ、そういう人の言葉なんだと思って聞くようにしている」というこたえはとても納得がいきました。無意識のうちだったのですが、そういうインタビューをしていた時は分析がしやすかったし、言葉の意味も解釈しやすかったように思うからです。

「コミュニケーションとは感情と意味をやりとりすることである。」

大事な人達とのコミュニケーションを大事にしていこうと、改めて思いました。先生の著書を早速、手にとろうと思っています。